

オーストラリアの真珠王 佐藤虎次郎について

田中 学

平成29年6月18日に深谷公民館
で行った「深谷上杉・郷土史研究会
第169回歴史講座」を基に、令和
4年12月に一部修正しました。



オーストラリア ケアンズ市の博物館で



私は平成19年（2007年）、妻とオーストラリア観光に行きました。すると、ケアンズ市の博物館には、アラフラ海で真珠貝を採った南紀地方の若者と本庄市兎玉町出身者の資料がありました。

平成21年（2009年）に和歌山県に旅行したら、アラフラ海で真珠貝を採った潜水夫の顕彰碑がありました



碑文

この顕彰碑はオーストラリア海域において真珠貝等の採取に従事し、不幸にも亡くなられた串本町出身者等の御霊を慰めるとともに、当海域における真珠貝産業の振興発展に寄与された先人達の偉業を顕彰し、その功績を末永く後生に伝えるため建立するものである。

日本人は1878年から1941年まで、北部オーストラリアの産業であった真珠貝、高瀬貝、ナマコの採取漁業に雇われ、島の人々とともに活躍し、漁場の発見、漁法の改良を通して、この漁業を基幹産業とする等地域の発展に貢献した。

この碑は、日本人移民渡航100年を記念して木曜島に慰霊塔が建立されたことを受け、当地から遙かオーストラリア海域を眺望できるこの地に串本町の補助金をうけ、串本町長を会長とした顕彰碑建立発起人会を結成して建立したものである。

1998年9月吉日

顕彰碑建立発起人会

私は本庄市からオーストラリアに渡り、南洋真珠貝の採取事業に成功し、「木曜島のキング」とまで呼ばれた佐藤虎次郎さんについて、勉強を始めることにしました。

すると、真珠採取だけでなく、横浜で新聞を発行したり、群馬県で国会議員になったり、朝鮮に行ったりと、波瀾万丈の人生だったので、詳しく調べることにしました。



佐藤虎次郎

佐藤虎次郎氏の生い立ち

佐藤虎次郎（旧姓：茂木）は、元治元年（1864年）6月15日、武蔵国児玉郡太駄村（現：本庄市児玉町太駄）の茂木太平の三男として生まれました。 【1歳】

茂木太平は、江戸時代には代々、太駄村の名主、明治維新後は太駄村の戸長（今の村長）をしています。

虎次郎は小学校を卒業後、村内の塾に通い漢学を修め、小学校の助教を勤め5円の棒給を得て教鞭をとったと言われています。 【15歳】



本庄市

深谷市

太駄村

生家の動画



最初に映った古い家は、現在は納屋として使われているようです。

茂木家は、左側にあった新築の家に住んでいます。

なお、虎次郎が生まれた当時の生家は、もう少し低い場所にあり、洪水を避けて現在地に移ったと言われています。

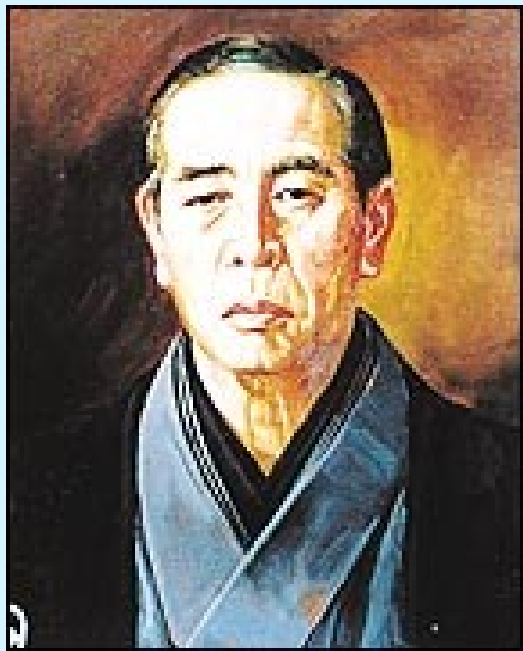
おおだ はっこのがや

本庄市児玉町太駄の八殿谷と言う集落にあります。



茂木虎次郎の青年期

明治12年（1879年）、虎次郎が16歳の時、渋沢栄一の紹介により、原善三郎を頼って横浜に出て、生糸貿易で成功した「亀屋」で丁稚として働きました。【16歳】



武蔵国賀美郡渡瀬村
(埼玉県児玉郡神川町)
名主 原 善三郎



武蔵国榛沢郡血洗島村
(埼玉県深谷市)
名主 渋沢 栄一



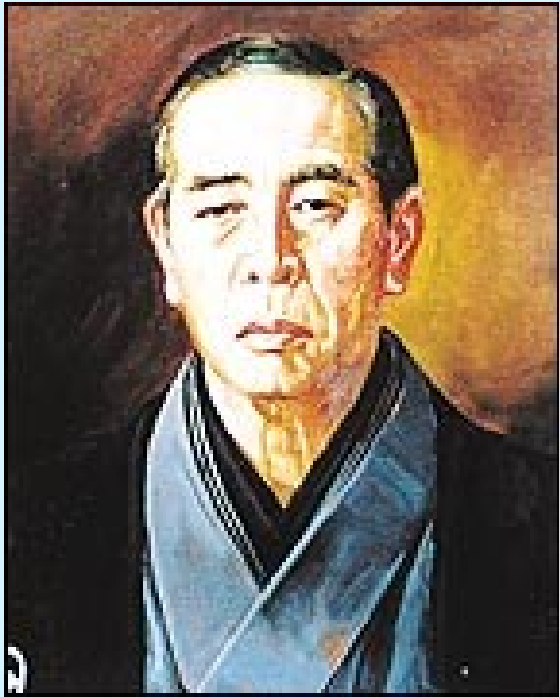
明治12年（1879年）当時、渋沢栄一は39歳で、「第一国立銀行頭取」「東京商法会議所会頭」と、めざましい活躍をしていました。



第一国立銀行



東京商法会議所



明治12年（1879年）当時、原善三郎は53歳で、生糸貿易で成功した「亀屋」を経営する他、「第二国立銀行頭取」「神奈川県議会議長」といった名士でした。



当時の第二国立銀行



当時の神奈川県庁



原善三郎の生まれた渡瀬村（現：神川町）と茂木虎次郎の生まれた太駄村は山を境にした隣村で、共に上総久留里藩の藩領でした。

虎次郎は向学心が高く、原善三郎の生糸商「亀屋」で丁稚として勤務に励みました。

また、商人の知識を研磨し、商業の改良を図る「横浜研摩会」と言う勉強会に参加しました。



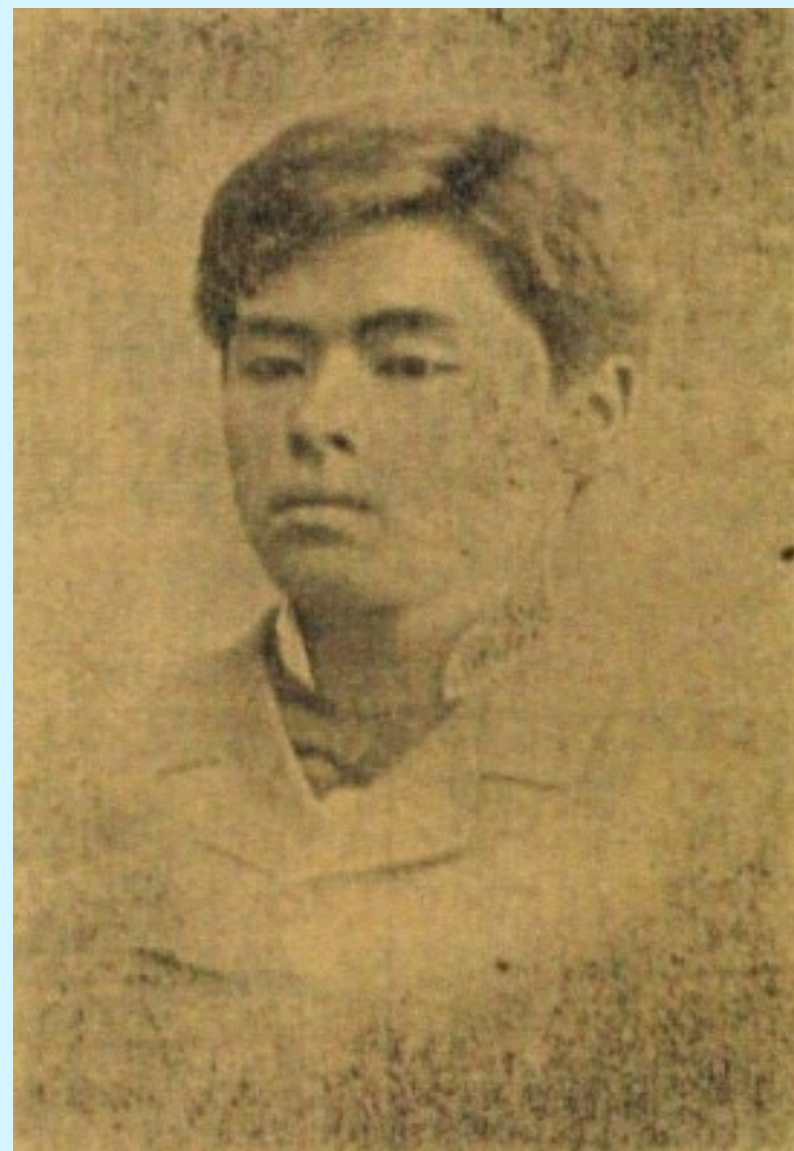
本町通り〔彩色写真〕 明治20-30年代
(左：生糸検査所・町会所
右：横浜郵便電信局)

青年になるにつれて、虎次郎は海外遊学の志を抱きました。

「横浜研摩会」は、神奈川県議や横浜商法学校長などを招いて盛大な送別会を開いてくれた。

明治18年（1885年）渡米、虎次郎はサンフランシスコに着いた。

【22歳】



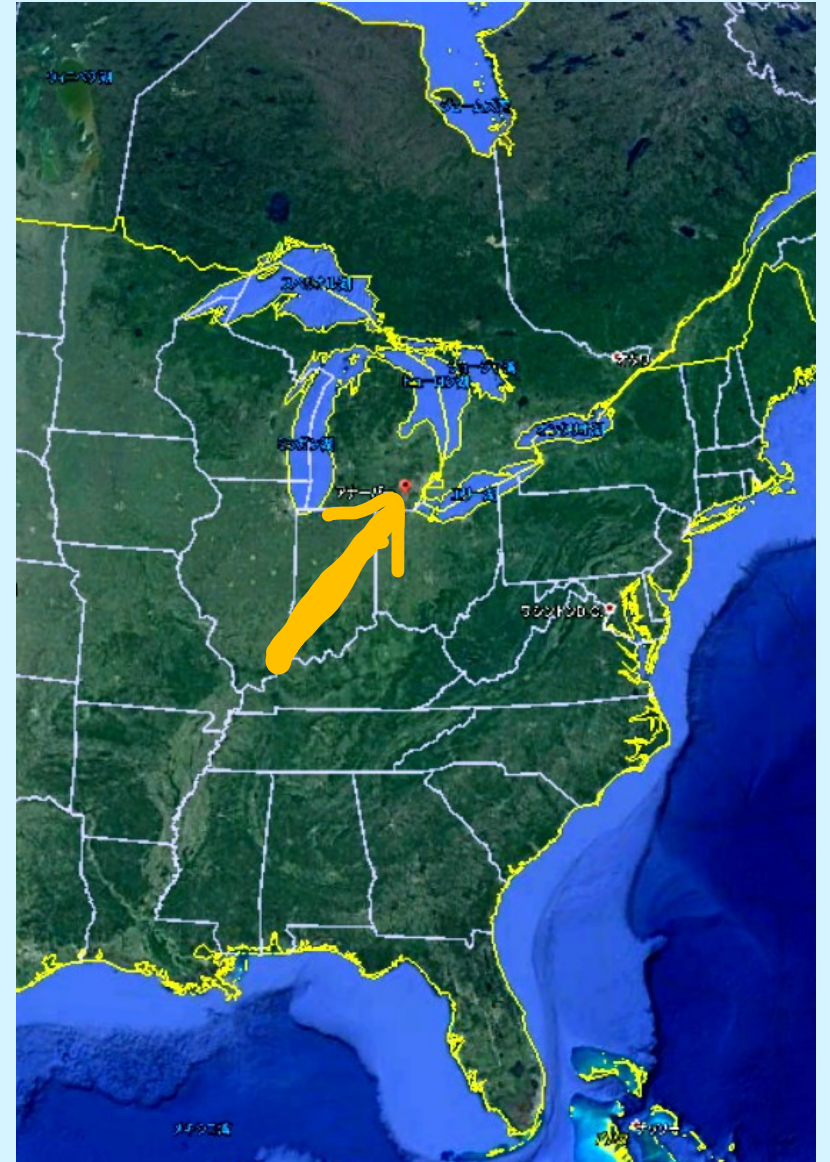
渡米当時の佐藤（茂木）虎次郎

アメリカでの茂木虎次郎

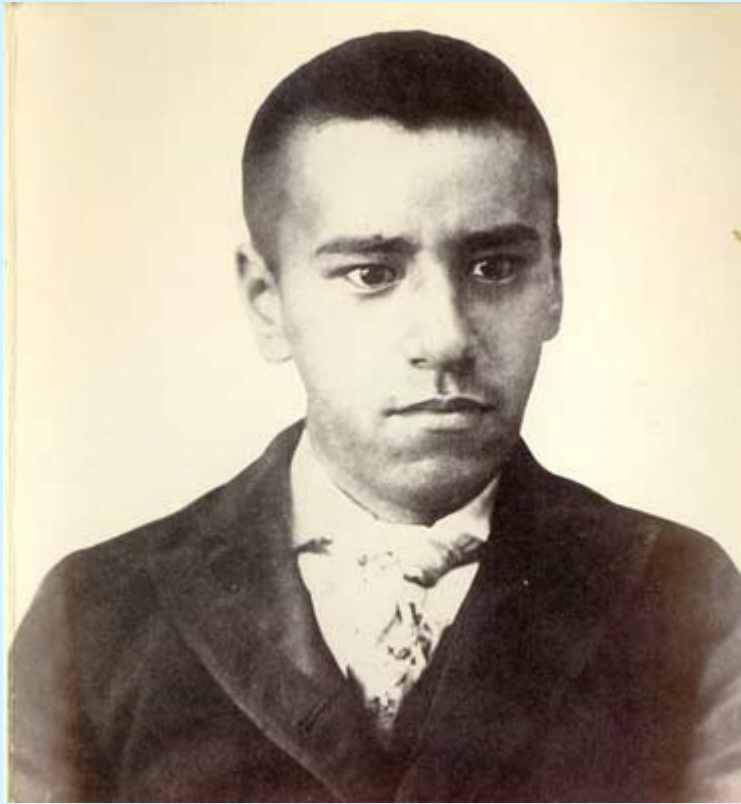
虎次郎は、木材の伐採労働から皿洗いの雑用までこなして学費を稼ぎ、苦学の時代を送った。【22歳】

そしてサンフランシスコのヘステイング法律学校に学び、2年後にデトロイト郊外のアナーバーにあるミシガン州立大学法科に入学している。

【24歳】



紀州の南方熊楠と交友



南方熊楠

虎次郎は、アメリカのミシガン大学に留学した時、野中の一軒家を格安で借り受けて自炊し、勉強や演説活動をしていました。

そこに、和歌山県の南方熊楠（博物学者・民俗学者として著名）が同居し、読書と植物採集を中心に活動しましたが、南方熊楠はひとりぼっちで家にいる時、吹雪の寒さには苦勞したようです。

佐藤虎次郎と南方熊楠は、
道明寺糰（ほしい）を食べ
ていました。

糯米（もちごめ）を蒸して日に
干したものの。道明寺で創始。

（道明寺は、大阪府藤井寺市にある真言宗御室派の尼寺）

水や熱湯を注いでやわらかくして食べ、軍糧あるいは旅
の携行食として重用された。

主に桜餅などの和菓子材料とする。



みなかた くまぐす

南方 熊楠

1867年4月15日～1941年12月29日

南方熊楠は、和歌山県が生んだ博物学の巨星。

東京大学予備門中退後、19歳から約14年間、アメリカ、イギリスなどへ海外遊学。さまざまな言語の文献を使いこなし、国内外で多くの論文を発表した。

研究の対象は、粘菌をはじめとした生物学のほか人文科学等多方面にわたり、民俗学の分野では柳田国男と並ぶ重要な役割を果たした。生涯、在野の学者に徹し、地域の自然保護にも力を注いだエコロジストの先駆けとしても注目されている。

開発や廃仏毀釈で荒れ果てた熊野の森を守った

虎次郎は、勉強の傍ら、南方熊楠と共に、アメリカ留学生仲間に手作りの回覧新聞「珍事評論」や自由民権運動の「新日本」を発行していました。

明治23年（1890年）卒業して学士号を得た。

虎次郎の卒業論文は「廃死刑論」で、学友の協力のもとこれを出版し、高い評価を得て、その報酬で帰国費用に充てたとされています。【27歳】

南方熊楠とは、その後も親友を続けています。

虎次郎は、帰国後（明治23年8月15・16日）に太駄村や本庄町で開かれた「埼玉県政談大演説会」で、粕屋（橋本）義三や伊藤仁太郎らと共に、自由党弁士として登壇している。【27歳】

虎次郎は、最初は石川三四郎の親の下宿に住んでいました。

石川三四郎は、山王堂村（現：本庄市）出身の名主の子で、その後虎次郎や粕屋（橋本）義三の家の門番で住み込んだ。

後に、社会運動家となり、田中正造と足尾銅山鉍毒事件に取り組んだ。



虎次郎は、アメリカの留学仲間、粕屋（橋本）義三と「自由新聞」に参画した。

【27歳】

自由新聞は、明治時代に自由党が刊行した日刊の党機関紙です。

板垣退助らと路線対立があり廃刊した。

粕屋（橋本）義三は、入間市から埼玉県会議員に当選し、衆議院議員に10回当選し、衆議院議長に就任した。



粕屋（橋本）義三

中島夫妻と交流

帰国後、虎次郎は東京で土佐出身の代議士で初代衆議院議長 中島信行の家に入入りしていた。

そして、女権拡張運動家・作家・教師である奥さんの
しょうえん
中島湘煙と出会った。



中島信行



中島湘煙

紀州の「佐藤おくの」と結婚

ひがしむろぐん

中島夫妻の紹介で、和歌山県東牟婁郡高池町（現：古座川町）の山持ちで材木商、「佐藤長右衛門」の娘「おくの」と知り合い結婚した。【28歳】

佐藤家は、養子として紀州へ来てもらうことを望み、虎次郎はこれを承諾して高池町（現：古座川町）で新婚生活を始めた。

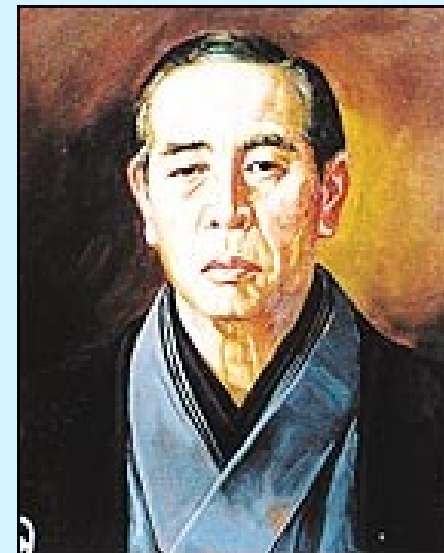


【余談1 原家】

なお、この中島夫妻は、翌年に原善三郎の孫娘（屋寿）の仲人もしています。

ここで婿になったのが原富太郎（三溪）で、原商店（屋号：亀屋）・原合名会社を発展させただけでなく、横浜市の生糸産業を振興させ、更に、関東大震災で大打撃を受けた横浜市の復興に尽力しました。

その後、三溪園を無料公開しています。



原善三郎



原富太郎（三溪）

【余談2 原家】 17歳になった青木富太郎（後に原）は上京し、東京専門学校（現早稲田大学）で政治、経済を学び、跡見女学校で教鞭をとりました。

ある日、富太郎が新橋駅のカフェに居たとき、前を通り過ぎようとした女性の下駄の鼻緒が切れました。富太郎は手ぬぐいを引き裂いて、彼女の下駄の鼻緒をすげ替えてあげました。

彼女は跡見女学校の教え子で横浜の豪商・原善三郎の孫の原屋寿だということが判り、二人の仲は深まっていく。

跡見女学校の跡見花蹊校長や同僚の中島湘煙の尽力により縁談はまとまり、明治24年中島信行・湘煙夫妻の媒酌により、数えで24歳と18歳の二人は結婚する。富太郎は翌25年、原家の婿養子となり、原商店で店員見習いを始める。

【余談3 原家】 横浜 三溪園

面積 175,000m²
(17.5ha) (418m四方)



【余談4 原家】 神川町 天神山山荘

4月だけ限定公開



天神山を公開しますので
次のことに注意して楽しくお過
し下さい
一期間 四月一日より四月末日まで
一時間 午前八時より午後六時まで
一枯れ枝が落ちることがあるので
注意して下さい
一車の乗り入れは禁止します
一火気は使わないで下さい
一カンビン類紙くず等は必ずお持
ち帰り下さい
一庭木などをいたぬないように気を
つけて下さい
企亀屋



高池町（古座川町）の佐藤家

高池町（現：古座川町）の材木商、「佐藤長右衛門」は、和歌山県で有数の資産家で、大阪や京都にも別荘を持っていました。

佐藤家の収入源は、木炭でした。



田辺市

新宮市

新宮市

上富田町

白浜町

那智勝浦町

古座川町

太地町

すさみ町

古座川町

旧 高池村

串本町

和歌山県
南紀地方





古座あさかぜ園

古座川町



明神郵便局

38

明神中

十万岳

牡丹岩

月の瀬温泉

228

古座川町役場

虫喰岩

227

旧 高池村

宝嶋クリーンセンター

重畳山

串本町

古座

227

38

紀勢本線

42

熊野街道

Google

紀勢本線

- 古座川町は2, 749人、面積は294.5平方キロ
- 高池地区は1, 310人、町の中心部
- 町の96%が森林、良質な古座川材の産地
- 町役場は、佐藤家の住居跡地



山間部では温暖かつ湿潤な気候のため、古来より良質の材木を産しており古座川材と称された。この古座川材を古座川沿いの村々が古座川に流し、これを下流の**高池**や西向、古座といった場所で受け取り、下流の町が栄えることとなった。

江戸時代末期ごろの古座川流域は、材木材よりも備長炭の材料としてのウバメ櫨を使った上質な炭づくりが大変盛んに行われており、江戸や上方の台所燃料として大変好評で、**下流の高池にある佐藤家がこれをほぼ独占供給していた**。現在でいえば東京ガスと大阪ガスの運営を一手に担うようなものであり、耕地面積の少なさゆえに年貢米を納められず投獄される地主がいるほどの貧しい地域にあっては異色の豊かさだった。

虎次郎は、結婚当初、高池町で熊野辺小学校の教師をしていた。

明治26年（1893年）、虎次郎は外務大臣陸奥宗光の囑託を受けて、オーストラリアでの移民の実態を調査し、オーストラリア進出を決意しました。【30歳】

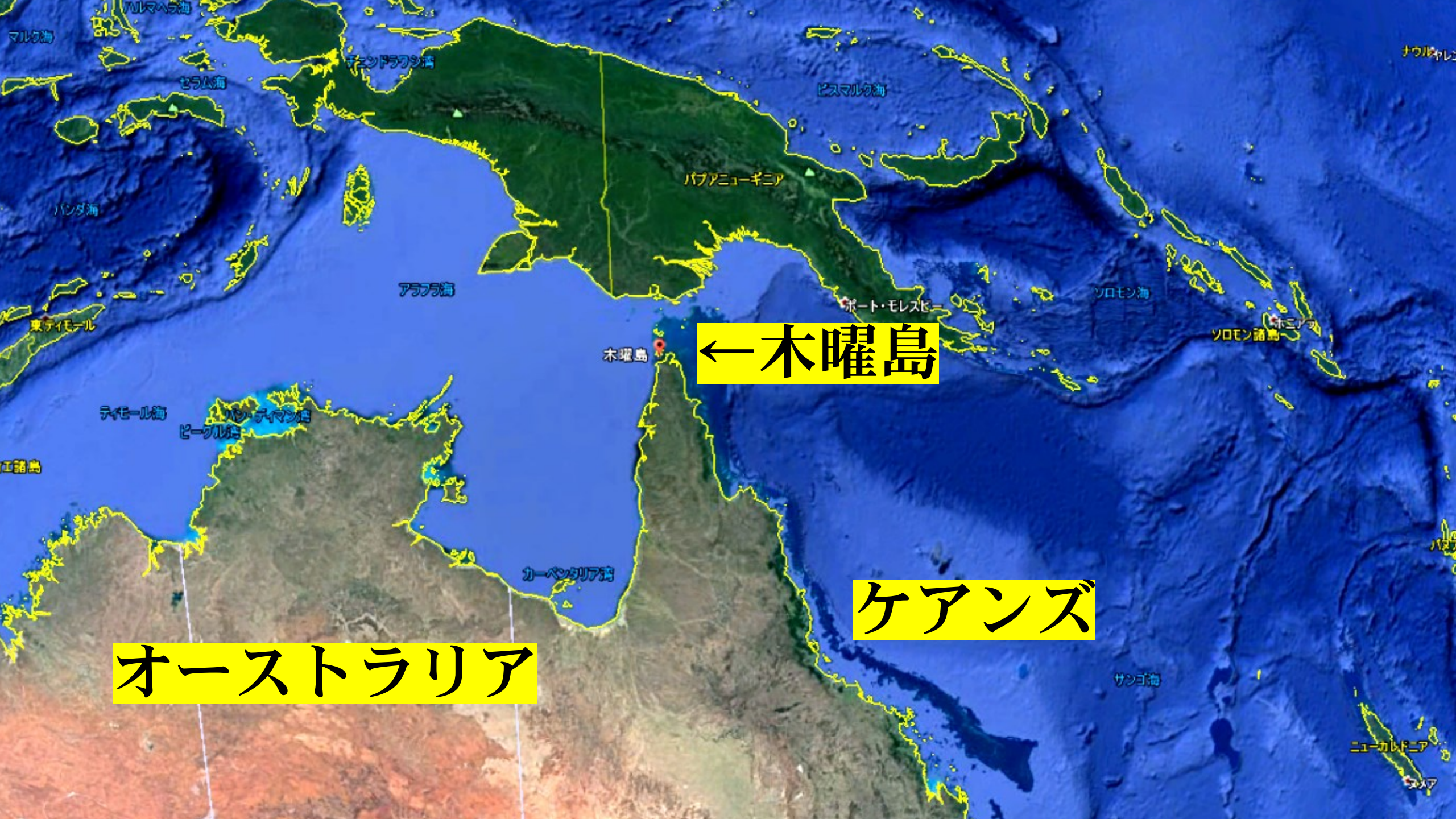


外務大臣陸奥宗光の囑託・・・なぜ？

仲人をしてくれた、土佐出身の代議士で初代衆議院議長 中島信行の最初の妻：中島初穂（死亡）が、外務大臣 陸奥宗光の妹だったのです。

そんなことで良いのか？

良いんです。 忖度はありませんでした。



←木曜島

ケアンズ

オーストラリア



Mowarui Island

Hammond Island

Palilug Island

← 木曜島

木曜島

Waiben (Thursday Island)

Gialug Island

Ngurupai Island (Horn Island)

Muralug Island

プリンス・オブ・ウェルス

Entrance Island

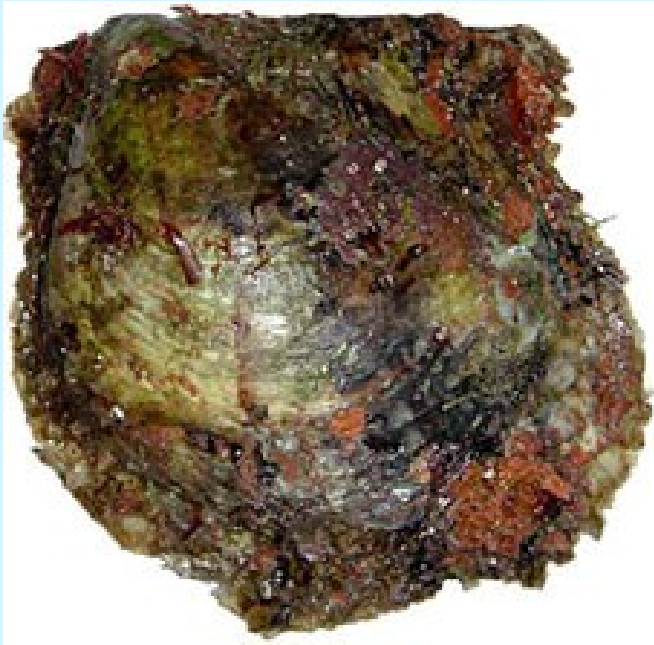
Possession Island

パンサンド

クイーンズランド洲サースデーアイランド（木曜島）に和歌山県東牟婁郡高池町の青年たちを呼び寄せ、真珠採取事業、船舶補修事業、商店経営など幅広く事業を行った。

特に、洋服の高級ボタンや工芸品に用いられる白蝶貝の採取事業では、和歌山県出身の優秀な潜水夫の働きでその実権を握り「木曜島のキング」と呼ばれ白人の同業者を圧倒した。

真珠



本真珠

鮑玉（あわびだま、アワビの内部に形成される天然真珠）。
現在はアコヤガイの真珠。御木本幸吉が養殖に成功。

南洋真珠

白蝶貝（シロチョウガイ） から産する真珠。
主にオーストラリア、インドネシア、フィリピンで採取。

アラフラ海の真珠貝



白蝶貝



黒蝶貝



高瀬貝



ボタン穴の白蝶貝



ボタン穴の黒蝶貝



時々、南洋真珠が

領 収 証

No.

田 中 学 様

		千		円
	¥	2	500	

収 入
印 紙

但し

上記の金額正に領収致しました。

平成 22 年 3 月 26 日

有限会社 あらふら丸商会

三重県志摩市大王町名田730-2
電話 (0599)72-0052(代)
http://www.arafura.jp

現金			円
小切手			
振込			
約手			
相殺			

約手期日

取扱者印



請 求 書

No.

田 中 学 様

平成 22 年 3 月 27 日
下記の通り納品申し上げます

合計金額 ¥ 2,500 -

三重県志摩市大王町名田730-2
(有)あらふら丸商会

三重県 電話大王<05997>2-0052
東京事務所 電話 03<3551>1690
小売部 電話 <05997>2-3947
FAX <05997>2-0538

月日	品 名	数 量	単 価	金 額	摘 要
	白蝶貝	1		500	
	白蝶貝穴明け	1		300	
	黒蝶貝穴明け	1		200	
	南洋真珠	1		1000	
	送料	1式		500	
	小 計				
	消 費 税				
	合 計			2500	



木曜島の港



墓地の慰霊碑（日本人来島100年記念）

木曜島の慰霊碑は、トレス海峡において死亡された約700名の日本人の霊を慰め、彼等の功績を後世に伝えるために建立されたものです。日本人は1878年から1941年まで北部オーストラリアの基幹産業であった真珠貝、高瀬貝、ナマコの採取漁業に雇われ、島の人々とともに活躍し、漁場の発見・漁法の改良を通して、この漁業を発展させた。



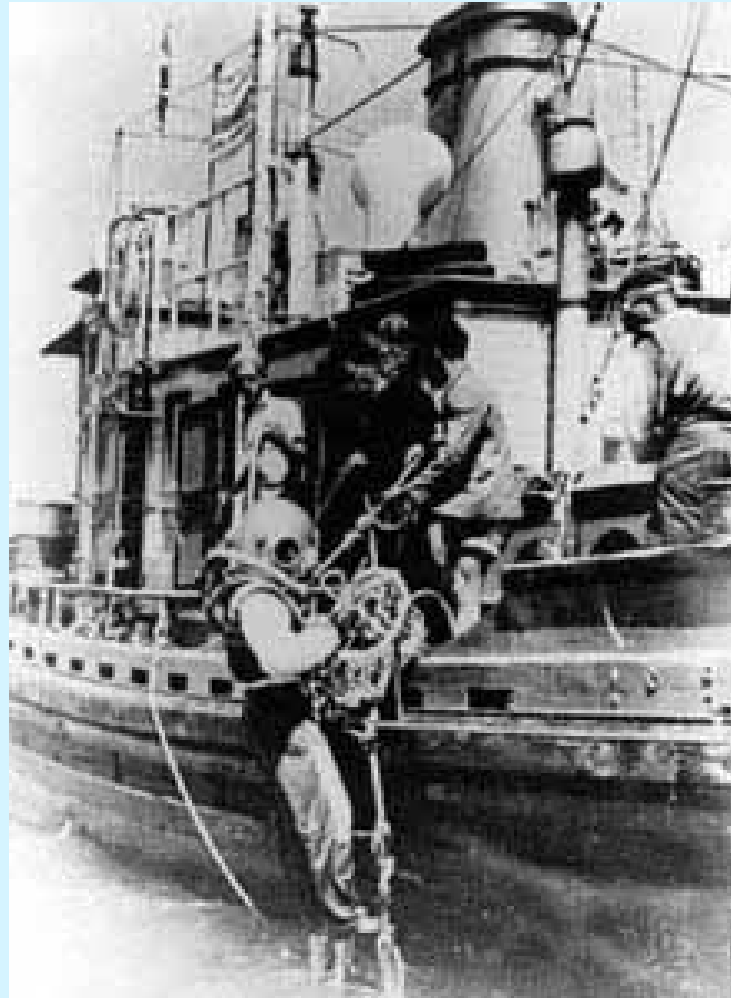
当時の潜水服



天然真珠貝の採貝



真珠ダイバーの姿



天然真珠貝の採貝



採取した真珠貝と殻取り作業



採貝船は、パールラガー船と呼ばれ、10～30トンの小規模なものでした。

海底を歩いて貝を採る潜水ダイバー（1～2名）、船上で命綱を預かるテンドラー（多くは船長を兼ねる）、機関士、水夫、炊事係など、6～9人で構成される。

ダイバーは、毎日8～9回、1時間の潜水作業を行った。

パールラガー船



パールラガー船





潜水ダイバーのヘルメットと靴



白蝶貝は結構大きい



手押しポンプの例

潜水夫は死と隣り合わせの危険な仕事にも関わらず、明治30年（1897年）頃は島の人口の三割が日本人だった。

貝を採るダイバーは、当時小学校教員の年収が100～130円、農民の賃金が15～20円の時代に、約1200円、命綱を預かるテンダーという職の人でも350円の収入があったと言われ、かなりの高賃金だったのです。

明治時代の1円は、現在の2万円に相当します。



潜水服は、陸上では
100キログラム。

水中では浮力があつ
ても40キログラム



海底 10～30メートル

送風ホース

連絡用ロープ

潜水ダイバーとテンドー（船上の補助夫）は、1本のロープで連絡していた。ロープ信号には21通りの意味があった。

1回ロープを引く「上昇したい」	揺らしながら1回引く「獲物袋をあげろ」
2回引く「空気が足りない」	揺らしながら2回引く「危険」
3回引く「ホースがたるんでいる」	揺らしながら3回引く「ホースをあげろ」
4回引く「ブイを浮かせ」	揺らしながら4回引く「砂山がある」
5回引く「帆を下げろ」	揺らしながら5回引く「帆を半分に」
6回引く「スクリュウを回せ」	揺らしながら6回引く「スクリュウ停止」
7回引く「船を右に」	揺らしながら7回引く「船を左に」
8回引く「船が速すぎる」	揺らしながら8回引く「船が遅すぎる」
9回引く「貝多し」	揺らしながら9回引く「旋回しろ」
10回引く「潮の流れが変わった」	2引き、揺らし、2引き「船の右に行く」
	3引き、揺らし、3引き「船の左に行く」

船上のクルーはこの信号に全身全霊の注意を注ぐが、それでも事故は多発する。こうして多くのダイバーが深海で命を落とした。

潜水病

深い海に潜り、急浮上すると、体内に溶解している気体の溶解度が減少します。その結果窒素ガスなどの気体の体積が増加し、組織が圧迫され、血液の流れが悪くなります。この状態を、潜水病（減圧症・潜函病）といいます。

水中では、10m深くなると1気圧上昇します。潜水後、浮上の数時間以内に手足の関節部の痛み、息が詰まる、体が動かないなどの症状で苦しむ、死に至ります。



オーストラリア アラフラ海 木曜島で 1894年頃
「ジャパニーズ・スポーツ・カーニバル」

虎次郎は数十隻の採貝船を保有し、多数の従業員を雇って、年間十万円以上を稼いでいた。 **(現在の2億円相当)**

しかし日本人が成功すると、僻みや妬みが出てきて、白人業者はクィーンズランド州政府に圧迫を働きかけます。

日清戦争後、黄禍論が盛んになり、オーストラリア政府の白豪主義により、日本人事業家に対する圧力が強くなり、虎次郎は何度も明治政府やクィーンズランド州政府に働きかけたが、移民制限法が制定された。 **【37歳】**

虎次郎は、やむなく明治33年に店を閉めて帰国した。更に、帰国途中に妻おくのも病気で亡くなりました。

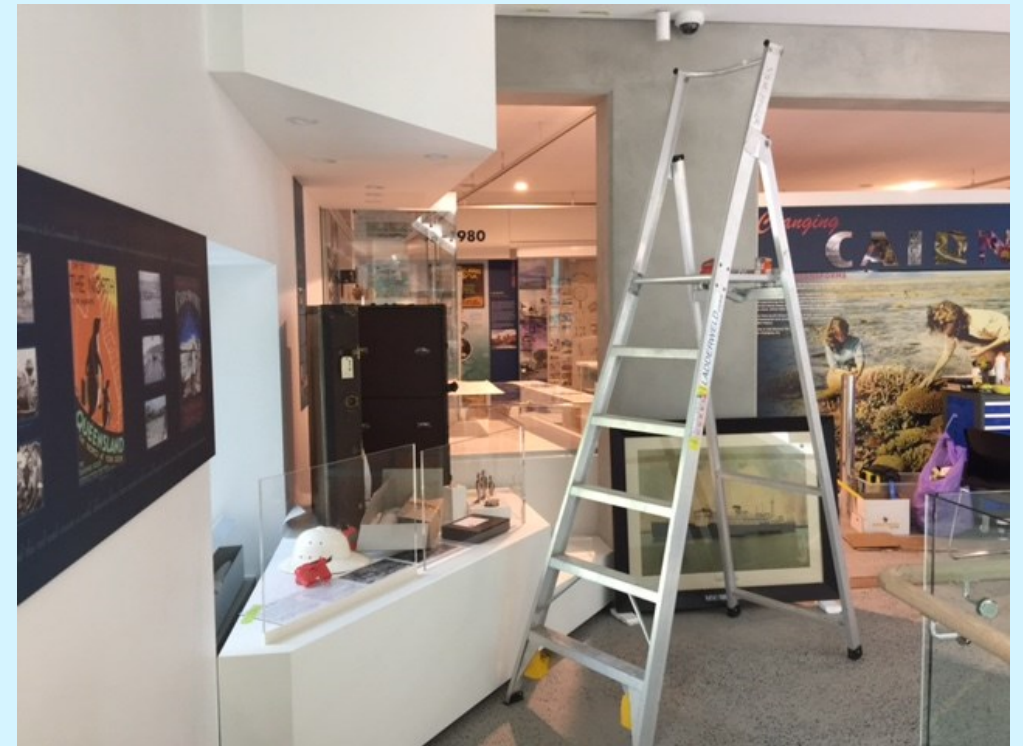
ケアンズ博物館から写真を送っていただきました



ケアンズ博物館は、平成29年に新築改装中でした



平成29年5月27日写真入手
平成29年6月に再び開館予定



この3枚の写真と、29頁の文書コピーで、
35.8豪ドル（3,024円）+海外送金
手数料（750円）で、4千円近い出費（涙）



木曜島の
日本人クラブ



日本人ダイバーの仮装



木曜島の日本人の踊り

JAPANESE VISION AND NORTHERN AUSTRALIA

(日本人の夢と北部オーストラリア)

NORTHERN AUSTRALIA

The early role of Japanese settlers on Thursday Island

'The island was no good. Old Kurazo Miyagura speaks ill of the island, while the expression on his face reveals affectionate feelings. The water was bad, some grass and trees survived with rain water but nothing fruitful grew; that was why the Airanda (Islanders) around there did not come near; it must have been an uninhabited island before Meiji era. All the men walking on the beach were diminutive Japanese and they were all Kumano men like us; everyone knew who they were and which village they came from; if I close my eyes, like this, I can even see their faces. I don't want to open my eyes.'
The man is too old. He begins to weep – still, his face has nothing to do with his sentiments, a rocky Kumano face (Shiba 1980: 9-10. Translated from Japanese text).

Introduction

In Ryotaro Shiba's novel, *Evening Party on Thursday Island*, an old Japanese diver from the Kumano region (the former name for southern Wakayama Prefecture) awkwardly expresses his affection for Thursday Island known locally in the Torres Strait as Waibene (Figure 1). The original settlement of Port Kennedy was established in 1877 at the island's south-west point after the administration had moved from Somerset on Cape York. It is no accident that this tiny island has a similar nomenclature in Japanese (*Mokuyo-to*), reflecting its former importance to the late nineteenth century economies of both Australia and Japan. (Ganter 1994). The Japanese were

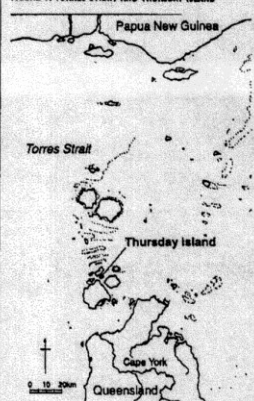
pioneers in the establishment of the pearl-shell fisheries and sugar cane industries of Far North Queensland in the 1880s and 1890s, their chief legacy being to strengthen and develop these industries through contract labour migration or *dekasegi*. By 1898 for example there were 2,300 Japanese working in the Queensland sugar industry (Meaney 1999). The significance of such a migrant presence from the perspective of Australian urban settlement history is reflected in the near total dependence at the turn of the century on pearl-shell collection and export in several important northern townships, like Broome (Western Australia) and Thursday Island settlement (Queensland). Indeed, Broome and Thursday Island between them were responsible for over half the world's supply at this time (Bach 1961).

There are many signs today of Japanese settlement in these former chief Australian pearling ports but the effects of World War II-inspired urban redevelopments on Thursday Island in particular and natural disasters have removed most of the original timber buildings. The human presence is more obvious today in the remaining families living in both towns bearing Japanese names and possessing direct kinship connections with original migrants. This lack of tangible urban artifacts is a reminder that the secrets of even quite recent urban history may lie in locations and sources far removed from the towns themselves.

The chief questions posed here inquire why Thursday Island in particular was singled out by influential Japanese observers in the late nineteenth century as being a successful or even utopian

settlement (Watanabe 1894, Hattori 1894); and what special circumstances appear to have made it more attractive as a place where Japanese entrepreneurship might flourish than mainland migration centres like Townsville or Broome? It may be hypothesised that there were certain advantages to be found in a small island setting, when set against mainland locations, which enabled Japanese forms of social and economic organisation to flourish in a manner less evident elsewhere. Further, that such attractions were recognised very early in the establishment of the settlement by a small number of migrants, such as Torajiro Sato (Figure 2), who were well educated, possessed an international outlook, and

FIGURE 1: TORRES STRAIT AND THURSDAY ISLAND



had the means to maximise the economic opportunities that came their way. Such ground in this time expected to member of a national parliament as Sato was destined to do.

To adequately explore the propositions posed requires investigation and assessment of Thursday Island's locational features, the social and economic organisation of the Japanese community and a comparison of this with conditions on the mainland. Considerable documentary evidence about the early years on Thursday Island is found in both Japanese and English-language accounts published in the late nineteenth century but the focus here is on the situation as viewed through Japanese eyes at the time. As far as material on individual migrants is concerned, the most significant among such sources are Japanese Ministry of Foreign Affairs archive files and travellers' accounts, many of which were first unearthed by Sissons in the 1970s. The research as a whole forms part of a wider study focused chiefly on the impact of Japanese migrants on urbanisation in the Pacific in the nineteenth and twentieth centuries.

Japanese migration and the process of settlement

Although Japan's connections with Australia are said to have begun as late as December 1867 with a visit of twelve acrobats and jugglers to perform at a theatre in Melbourne, as a nation Japan had established many prosperous trading settlements in the Asia-Pacific region from Formosa to the Moluccas, and from the Philippines to the Malay Peninsula, some two hundred years earlier (Frei 1991: 34). At the close of the Tokugawa period in the middle of the late nineteenth century a general opening-up allowed a return to the western Pacific. Japanese were permitted to travel abroad after 1866, leading to the first eyewitness accounts of life in Australia (Frei 1991). Traces of modern Japanese migration can be seen from the beginning of the Meiji era (1868-1912), as the first contract labour migrants were given passports to go to Guam and Hawaii in 1868 (Yano 1975). However, it was also the beginning of informal Japanese migration that took place with little or no government involvement. The usual steps in the



FIGURE 2: TORAJIRO SATO (1864-1924)
 BY PERMISSION OF NATIONAL LIBRARY OF AUSTRALIA

migration process were quite distinct. First, sailors hired by foreign ships became familiar with foreign ports. They were soon followed by a substantial flow of women known as *karayuki-san*, literally meaning those who sought a means of subsistence in South East Asia and the Pacific but the majority of whom were in reality prostitutes, or soon became so (Sissons 1977). Contrary to what might be expected, Japanese women outnumbered the men in many foreign urban centres in the Asia-Pacific region during the Meiji era. The presence of women was a clear indication of a Japanese stake in local development (Yano 1975).

Nonami Kojiro, who is generally regarded as the first Japanese to settle on Thursday Island, was a sailor and learned to be a pearl-shell diver in 1876 (Watanabe 1894, Hattori 1894). He and a few others did so well that Australian pearl-shellers started recruiting Japanese, first from Hong Kong and later directly from Japan. By March 1894, the number of Japanese on the island reached 720 (Sissons 1979) which was a significant total for a small settlement in the South East Asia-Pacific region during the mid-Meiji period. In Singapore which was one of the most important urban centres with a Japanese presence before World War II, the number of Japanese in 1895 was estimated at around 450 to 460 and less than 600 in 1897 (Shimizu & Hirakawa 1998).

WORKING ON THURSDAY ISLAND
 The British Anthropologist Alfred

Haddon made his second visit to Thursday Island in 1898 after an absence of 10 years and observed the considerable impact of the Japanese presence:

One great change in the population is very striking, and that is the great preponderance of the Japanese. So far as I remember they were few in number ten years previously, and were, I believe, outnumbered by the Manila men; now they form the bulk of the population, much to the disgust of most of the Europeans and Colonials (Haddon 1901: 2).

By March 1894 the seven hundred or so Japanese based on the island had grown to outnumber the local Europeans, forming half of the resident population total; and by 1897 a thousand Japanese were employed by, or associated with, the Thursday Island-based pearl-shell fishery. One third of the lugger fleet was now in Japanese hands (Sissons 1979, Ganter 1994). Although the pearl-shell fishery was largely exempted from the provisions of the 'White Australia Policy' introduced by the Immigration Restriction Act of 1901 (Bach 1962), this legislation and various measures that followed it acted to discourage permanent settlement and effectively dissuaded even greater numbers from remaining on Thursday Island and in other northern Australian towns.

The Japanese based on Thursday Island did not sign on as settlers but joined an industry that was of sufficient size and growth potential to ensure they occupied a permanent and important presence in the township that had emerged in the late 1870s. In addition to those working the pearling boats, they soon included merchants, providers of various kinds and boat builders. Indeed, the Japanese had a monopoly on the building of pearling luggers by the turn of the century and controlled all slipways on the island (Ganter 1994). By 1919-20 the proportion of divers' licenses at Thursday Island held by Japanese was as high as 90 per cent (Queensland Parliamentary report cited by Sissons 1979). Few married women came with their menfolk to Australia and social activity for the Japanese contract workers revolved around gambling, drinking and the attentions of the *karayuki-san* (Sissons 1977). The Japanese quarter of the small town was situated close to the main jetties and Customs House and became known locally as 'Yokohama' (Singe



JAPANESE ON THURSDAY ISLAND

D21465

Full Text rests with the original owner and, except as permitted under the Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike license, no part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or by any information storage or retrieval system, without the permission of the owner or publisher. For more information, contact the publisher, Cambridge University Press, 32 Avenue of the Americas, New York, NY 10013-2473, USA. Tel: (212) 924-7600 (info) or (212) 938-7611

REMAINS OF JAPANESE STRAIT ISLANDS (トレス海峡諸島の日本人遺跡)

(キヨハラ シュウジ)

REMAINS OF JAPANESE ON TORRES STRAIT ISLANDS

2

I. ON THURSDAY ISLAND

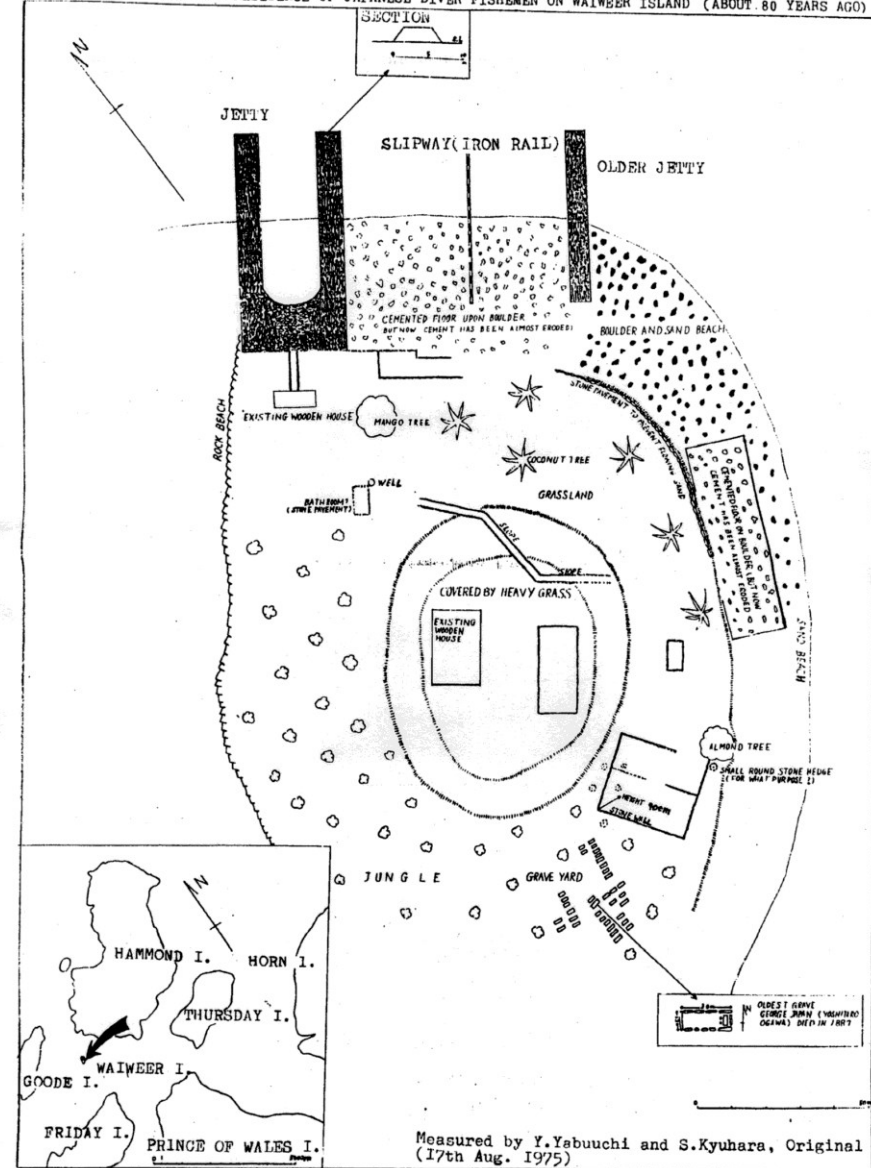
Base-stations of the pearl shell fishing in the Torres Strait Islands were in early stage located on about 10 spots (Somerset on Cape York Peninsula, Albany Island, Hoko Island, Possession Island, Friday Island, Goode Island, Waiweer Island, Prince of Wales Island, Mabuia Island, etc.). However, the companies managing these stations have ultimately concentrated on Thursday Island, and then this island has become the one and only base-station of the pearl shell fishing. This Thursday Island is the place on which a lot of Japanese had lived and worked during sixty three years from 1878 (Meiji II) to 1941 and they had so played an active part that the name of Thursday Island on Japanese map had been written in Japanese letters.

Thursday Island is situated on 10 deg. S. Lat., 20 km. north from the northern extremity of Cape York Peninsula, Australia, and very small island, area 3.24 km². But this island has not only become most civilized one among Torres Strait Islands, but also has had the highest density of population.

The number of population of Thursday island is, according to Australian census of 1971, 2237 (Islanders 1301, Aborigenes 99, white and half 837). This island, formerly having no inhabitants, has flourished owing to the pearl shell fishing and only in this island among Torres Strait Islands urbanization has been observed. During the golden age of the pearl shell fishing, about 300 pearl shell fishing boats were floating on Kennedy Port and Japanese were more than half of the population.

But the pearl shell fishing boats were only 6 in 1975 in which our investigation was done. And there were no islanders' divers, but New-Guinean divers were crew on the boats which Japanese ship-carpenters had in pre-war time built, and have been partly repaired, and these diving helmets which might have been used by Japanese divers have been used.

(Fig 2) RUINS OF RESIDENCE OF JAPANESE DIVER FISHERMEN ON WAIWEER ISLAND (ABOUT 80 YEARS AGO)



白豪主義とは、オーストラリアにおける白人最優先主義と、それに基づく非白人への排除政策です。

狭義では明治34年（1901年）の移住制限法制定から昭和48年（1973年）移民法で解除されるまでの政策方針を指す。

広義では、先住民族アボリジニやメラネシア系先住民への迫害や隔離など、オーストラリアにおける人種差別主義の歴史全般を指す。

また、クイーンズランドでは、当初日本人を入植させ、真珠貝採取や砂糖農園における技術系労働者が流入した。1898年には就労していた日本人は3274人に上った。

しかし外国人労働者への排斥運動のあおりを受けて、日本の移住希望者にも「ヨーロッパ言語による書き取りテスト」を課して実質的に流入を阻むようになっていった。

虎次郎は明治34年に横浜へ帰った。

【38歳】

南方熊楠の紹介で「中国革命の父」孫文と二度にわたり会談し、時事を論じている。

虎次郎は横浜経済界で演説を行っている。
また「太平洋策」や「対外政策」等の著作で、海外雄飛の持論を展開している。



孫文

虎次郎は、原富太郎などの後援で、「横浜新報」を創立しました。【39歳】

新聞社は競争相手の「横浜貿易新聞」と合併し、現在は朝日新聞系列の地方紙「神奈川新聞」となり、「テレビ神奈川」も支配下にあります。

明治 3 5 年 (1902年)	虎次郎が「横浜新報」を創立
明治 3 7 年 (1904年)	対立する横浜貿易新聞を合併
明治 3 9 年 (1906年)	横浜貿易新報と改題
昭和 1 7 年 (1942年)	神奈川新聞と改題
平成 1 3 年 (2001年)	テレビ神奈川の経営権を取得

政界へ進出



群馬県から衆議院議員選挙に出馬する。

郷里の埼玉や経済基盤の横浜ではなく、群馬県から出馬した背景には、原富太郎（三溪）が「原富岡製糸所」や「渡瀬工場」を経営して群馬県の養蚕産業を支配していたこと、群馬県下の地主層に影響力があつたことなどによる。

明治36年（第8期）、37年（第9期）、41年（第10期）と連続当選し、計9年間、最終的には立憲政友会に属して活動している。 【40～49歳】

富岡製糸場の変遷

明治 5 年 (1872年)	官立製糸場として操業開始
明治 9 年 (1876年)	日本人だけで操業
明治 26 年 (1893年)	三井家に払い下げ
明治 35 年 (1902年)	原合名会社に譲渡
昭和 13 年 (1938年)	株式会社富岡製糸所として独立
昭和 14 年 (1939年)	片倉製糸紡績株式会社に合併
昭和 62 年 (1987年)	操業を停止
平成 17 年 (2005年)	富岡市に寄贈
平成 26 年 (2014年)	世界遺産に登録、国宝指定

富岡製糸場



原富岡製糸場の商標

衆議院議員 佐藤虎次郎

第8回衆議院議員選挙 1903年03月01日投票 総理は桂太郎

群馬県郡部区 【定数：6 / 立候補者：8】

佐藤 虎次郎 【党派】中正倶楽部 2,220票

第9回衆議院議員選挙 1904年03月01日投票 総理は桂太郎

群馬県郡部区 【定数：6 / 立候補者：9】

佐藤 虎次郎 【党派】甲辰倶楽部 1,657票

第10回衆議院議員選挙 1908年05月15日投票 総理は西園寺公望

群馬県郡部区 【定数：6 / 立候補者：7】

佐藤 虎次郎 【党派】立憲政友会 2,969票

1903年（明治36年）第8回衆議院議員選挙当時の群馬県の選挙区は、前橋市1人、高崎市1人、郡部6人だった。

選挙権は直接国税10円以上の納税者。

有権者数は全国で約98万人で、人口の2.2%だった。

1908年（明治41年）第10回衆議院議員選挙では、日露戦争の戦費調達のために行われた増税で、結果として有権者数が前回総選挙時と比べて2倍以上に増加された。

第8回衆議院議員選挙

1902年12月28日公示 1903年03月01日投票

有権者数：958,322人 投票者数：825,826人 投票率：86.17%

群馬県郡部区 【定数：6 / 立候補者：8】 【40歳】

得票数	名前	党派・会派等	備考
当選 2477	日向 輝武	立憲政友会	
当選 2340	中島 祐八	憲政本党	
当選 2263	木暮 武太夫	立憲政友会	
当選 2220	佐藤 虎次郎	中正倶楽部	
当選 2048	久米 民之助		
当選 2024	高橋 庄之助	立憲政友会	
1967	須藤 嘉吉		
—	その他		※得票計55票

第9回衆議院議員選挙

1903年12月12日公示 1904年03月01日投票

有権者数：762,445人 投票者数：656,128人 投票率：86.06%

群馬県郡部区 【定数：6 / 立候補者：9】 【41歳】

得票数	名前	党派・会派等	備考
当選 2562	須藤 嘉吉		
当選 1807	木暮 武太夫	立憲政友会	
当選 1647	佐藤 虎次郎	甲辰倶楽部	
当選 1408	日向 輝武	無名倶楽部	
当選 1376	星野 長太郎	甲辰倶楽部	
当選 1333	武藤 金吉		
1291	中島 祐八	憲政	
791	高橋 庄之助		
—	その他		※得票計76票

第10回衆議院議員選挙 1908年04月10日公示 1908年05月15日投票

有権者数：1,590,045人 投票者数：1,356,179人 投票率：85.29%

群馬県郡部区 【定数：6 / 立候補者：7】 【45歳】

得票数	名前	党派・会派等	備考
当選 6260	細野 次郎		
当選 4376	武藤 金吉	立憲政友会	
当選 3814	須藤 嘉吉	大同倶楽部	
当選 3320	根岸 二太郎	立憲政友会	二はヤマヘンに君
当選 2969	佐藤 虎次郎	立憲政友会	
当選 2713	日向 輝武	立憲政友会	
—	その他		※得票計1448票

虎次郎は、中正倶楽部、甲辰倶楽部に所属し、第1次桂内閣を支持して日露戦争に関わる諸法案を支持した。

最後は立憲政友会に所属したが、立憲政友会は戦前の帝国議会において日本最初の本格的政党政治を行った政党。

当時の有権者は、25歳以上の男子、直接国税10円以上の納税者で、人口の2.2%だった。

明治41年の有権者数は159万人でした。

人口が2.5倍になっているので、推定250万人。

令和3年の所得税統計では、所得1千万円以上の男が203万人なので、現在では年収1千万円以上の男が、当時の有権者と推計されます。

虎次郎は、明治43年（1910年）日糖疑獄に連座して、議員を失職した。 【47歳】

【日糖疑獄】

日本精糖は渋沢栄一が明治29年（1896年）に社長として設立した製糖会社です。

明治35年（1902年）、『輸入原料砂糖戻税』による輸入規制を5年から11年に延長させるため、後の大日本製糖取締役らが帝国議会議員らを贈賄その他で買収した。

有力衆議院議員20名が失職し、佐藤虎次郎は、控訴して無罪となった。

群馬県では、支持基盤が地主や養蚕関係者だけだったので、有権者数の増加により、当選の目処が立たなくなってきました。

その後、明治45年5月の第11回衆議院議員選挙で、神奈川県横浜選挙区（定数2）から立候補したが、落選した。

親友の粕屋（橋本）義三が衆議院議長にまでなったのに対して、虎次郎は大臣にもなれず、中堅議員の域を脱することができなかった。

原富太郎（三溪）は、佐藤虎次郎に朝鮮で農場経営をさせようと、大正元年、京城郊外に農地13万坪を購入しました。

そして、大正3年に原合名会社を母体に「原拓殖部」を京城府（ソウル）に設け、周辺も含む15万坪を所有して、農地、果樹の経営に着手した。【51歳】

大正7年には、朝鮮農林株式会社を創立し、虎次郎は取締役として経営に当たった。【55歳】



虎次郎は、朝鮮での教育などにも携わっている。

大正8年、私立芝山学校長に就任した。【56歳】

大正10年には京城都市計画研究会を起し、常務理事となった。【58歳】

大正13年、「内鮮融和」の名の下に、日本人と朝鮮人の融和を図る同民会を起して常務理事になり、後に副会長に就任した。【61歳】

大正15年には、芝山普通学校長となった。【63歳】

虎次郎は京城（ソウル）に住んでいましたが、大正15年4月、故李王殿下弔問の帰途、金虎門前で凶徒に朝鮮総督の海軍大将齋藤実と間違われて襲撃されました。【63歳】

虎次郎は腹部・胸部・指先を洋刀で刺され負傷し、この時の傷に病原菌が侵入したため、次第に体調を崩して、昭和3年（1928年）9月6日に京城（ソウル）の京城帝国大学付属病院で死去しました。【65歳】

享年65歳でした。





虎次郎の墓地は、
東京都町田市の
多摩霊園にあり
ます。

佐藤虎次郎は、その全生涯を通じ、絶えず海外発展を意識し、またそれを実践してきました。

特に和歌山県のオーストラリア移民に関しては、恩人とも言える人物だったのです。

埼玉県に生まれ、渋沢栄一の紹介で、埼玉出身の原善三郎の横浜の店に勤め、和歌山県の若者とオーストラリアで活躍し、原富太郎（三溪）の支援で横浜の新聞発行、群馬県の国会議員、朝鮮での農場経営や教育振興に努めました。

この講演資料は、先達の上尾市の清水昭氏のご協力により、貴重な著作や資料をコピーしていただきましたが、浅学非才の為、この資料を生かし切っていない事をお詫び申し上げます。

また、本庄市教育委員会の野口泰宜氏資料や横浜開港資料館、日本女子大学教授だった吉良芳恵氏の資料を参照いたしました。

また、インターネットで色々と調査して作成しました。

写真提供：横浜開港資料館、他

関係書籍・参照資料・ホームページ

「木曜島の夜会」司馬 遼太郎

「南方熊楠外伝」笠井 清

横浜海港資料室 「佐藤虎次郎文書目録」

「紀の国の先人たち」和歌山県ホームページ

和歌山市民図書館 移民資料室

『歴史が眠る多磨霊園』編集者 小村大樹

『南方熊楠を知る事典』

木曜島へ真珠を採るためにやってきた日本人たち

探検コム オーストラリア「木曜島」へ行く

ご静聴に感謝申し上げます

初回：深谷上杉・郷土史研究会 169回歴史講座
平成29年6月18日 深谷公民館

オーストラリアの真珠王 佐藤虎次郎について

深谷上杉・郷土史研究会 理事 田中 学

137 [写真] 茂木(もてぎ) 虎次郎

元治元年6月15日(1864年7月18日)～1928年(昭和3年9月6日)

佐藤愛輔家(横浜開港資料館保管)

武蔵国児玉郡太駄町(埼玉県児玉町)の出身。郷里出身の商人、原善三郎を頼って横浜へ出、商人の知識を磨くことを目的として結成された「横浜研磨会」に参加しました。一八八四年(明治一七)八月渡米し、ミシガン大学に入学、法学士号を取得して一八九〇年(明治二三)六～七月ころに帰国します。ミシガン大学在学中に南方(みなかた)熊楠(くまぐす)らと親交を結び、熊楠から「留学七年中に、日本人として語るべきものはこのもののみ」と評価された人物で、熊楠らが発行した回覧新聞「大日本」の「持主」ともなっています。帰国後は自由党系の演説会に弁士として顔を見せ、また社会主義者となる石川三四郎に多大な影響を与えた人物としても知られます。石川は茂(もて)木(ぎ)を、「最も極端なる財産平均論者」だったと述べています。

138 [複写] 茂木虎次郎の渡米送別会 「東京横浜毎日新聞」1884年(明治17)8月15日

復刻版『東京横浜毎日新聞』より。横浜商人の知識研磨のために設立された「横浜研磨会」は、渡航直前の八月一三日に、送別会を開きました。参加者は三〇名余りでしたが、県会議員の来栖壮兵衛や早川覚兵衛、横浜商法学校長の三沢進も出席していました。

139 [複写] 茂木虎次郎が参加した横浜研磨会についての報道 「東京横浜毎日新聞」18

84年(明治17)6月17日

復刻版『東京横浜毎日新聞』より。横浜商人の知識研磨のために設立された「横浜研磨会」についての報道です。茂木はこの会員となっていました。

140 [写真] 茂木(佐藤) 虎次郎 帰国後の撮影

佐藤愛輔家(横浜開講資料館保管)

茂木は帰国後、「自由新聞」の発行人を引き受けますが、和歌山県東牟婁郡の佐藤家に養子に入り、再び留学し、またオーストラリアの真珠採取業者として知られるようになります。また明治三〇年代には、「横浜毎夕新聞」(後の「横浜新報」)の経営を引き受け、衆議院議員にも当選します。晩年は朝鮮侵略の先兵的な役割を担います。

141 佐藤虎次郎の死を報じる「同民」 「同民」四九号(1928年10月1日刊)

佐藤愛輔家(横浜開港資料館保管)

佐藤(旧姓茂(もて)木(ぎ))は大正期に、朝鮮農林株式会社を設立して土地の買い占めをはかり、また「内鮮融和」の名の下に「同民会」を組織し、植民地支配の最前線にたちます。一九二六年(大正一五)、宗学先の襲撃を受け、その傷がもとで亡くなります。朝鮮総督齋藤実にまちがわられての襲撃とも伝えられています。